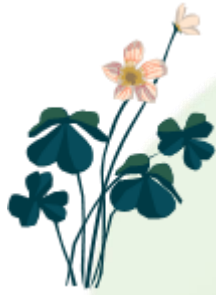


連載コラム



みずき野と
その周辺の
植物と昆虫



第 78 回

源氏物語の植物たち (4)



もとよし ふさお
本吉 總男

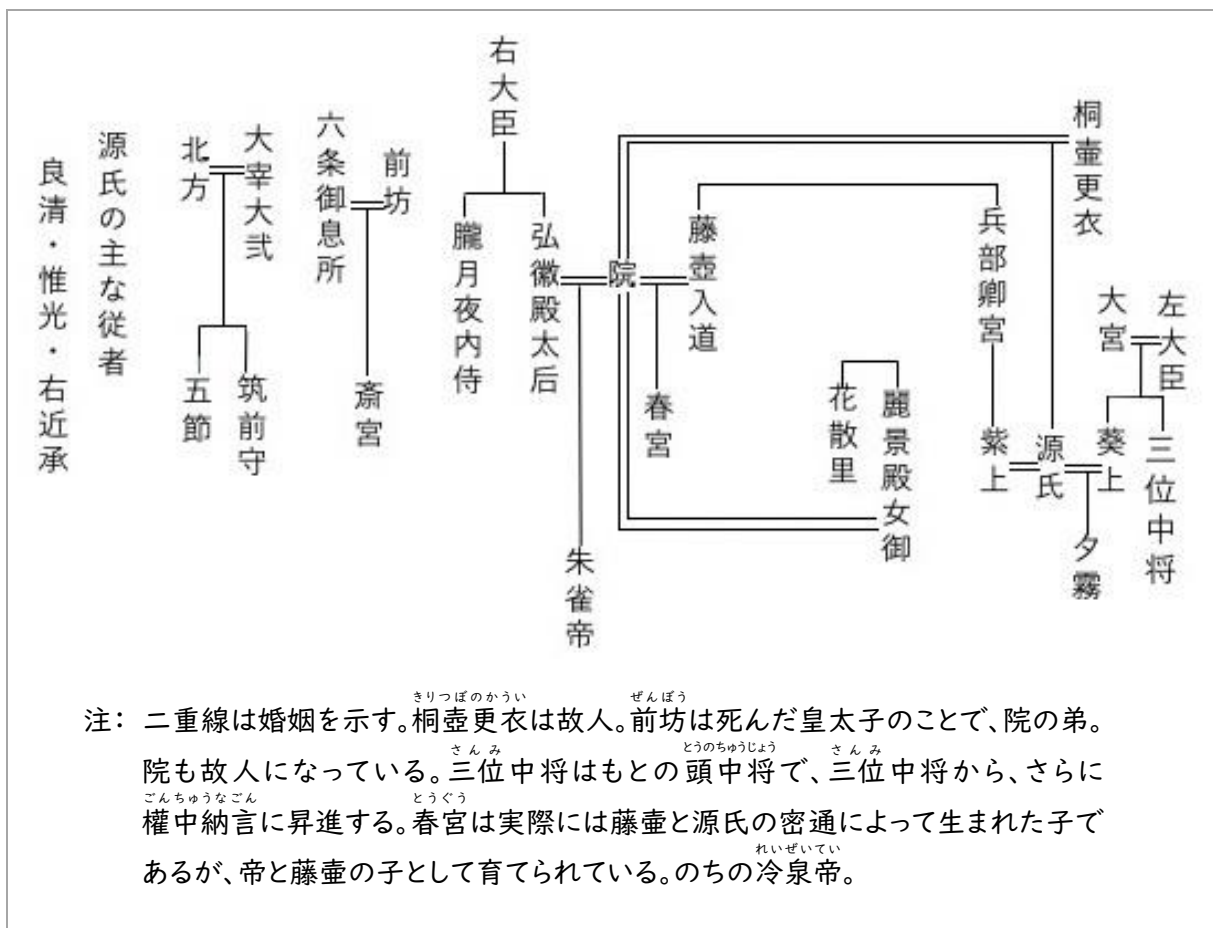
2024 年 12 月

前回は第 11 帖「花散里」まで述べました。今回は「須磨」「明石」「湊標」へと続きます。「須磨」は、源氏にとって、京での官職を捨てて須磨に移り住むという重大な出来事を綴る巻です。「須磨」「明石」に続く「湊標」は内裏に戻った源氏の栄光と苦悩が綴られています。

「須磨」のあらすじ

ここには植物はあまり出てきませんが、あらすじを少し詳しく述べることにします。

「須磨」の巻(源氏26~27歳、紫上18~19歳)では、「賢木」の巻ですでに述べられているように、京では右大臣が権力をほしいままにし、自身の娘で朱雀帝の母である弘徽殿太后は源氏を左遷する機会の到来と捉えています。かつて源氏を支えてくれた故葵上の父(左大臣)は官職を返上し、無官の人となって、源氏と葵上との間にできた息子(夕霧)と過ごしています。「須磨」の巻でのこの発端は「賢木」の巻(第77回参照)に述べられているように、弘徽殿太后の妹の朧月夜内侍との密通を右大臣に知られたことです。源氏自身は悪いことをしたとは思っていません。そんなことで罪を被る理由はなく、ただ不運なだけだと思っています。しかし、源氏にとっては、煩わしく、身の置き所のない状況の中



で、須磨すま（現在、神戸市須磨区すま）に落ちのびる決心をします。もし、流刑になれば罪人扱いになり、一生流罪地で過ごさねばならないかもしれません。

ただ、須磨すまに赴く際に、源氏にとって最も気がかりなのは最愛の妻、紫むらさき上のうへのことです。2日間会わない日があっても紫むらさき上のうへのことが気になって仕方がないほどですから、長い別れがどんなものか想像もつきません。これが永遠の別れになってしまうのではないかなどと思ってしまう。いっそのこと、須磨すまに連れて行こうかとも思いますが、海女もほとんど住まないほど寂れた土地に連れて行くのも忍び難く、そのまま都に留まらせることにし、自分の持ち物すべてを紫むらさき上のうへに託します。一方、紫むらさき上のうへにとってもこの別れはとても悲しく、辛いものです。紫むらさき上のうへの悲しみは、この巻の中で何度も繰り返されます。

源氏は、花散里はなちるさと、尼になった藤壺中宮ふじつぼのちゆうぐう、無官となったかつての左大臣、息子の夕霧さんみ、三位中将どうのちゆうじょう（以前の頭中將おぼろづくよのないしのかみ）に会って別れを告げます。朧月夜内侍おぼろづくよのないしのかみとの面会は避けねばならず、消息のみを伝え、朧月夜内侍おぼろづくよのないしのかみからは涙ながらの悲しみが伝えられます。その後、北山に眠る父（故院）の墓を拝み、院の生前の面影を思い浮かべます。春宮とうぐうには消息を伝え、春宮とうぐうからも悲しみが伝えられます。

須磨すまへは宵のうちに舟に乗り、翌日の午後4時頃須磨の浦すまに着きました。住居は海岸からやや離れた山の中です。当地のあちこちにある荘園の司たちを召し、良清よしきよ（源氏の家臣）に命じて住居を整えさせます。やがて源氏の心も静まって、京の親しかった人たちと消息を交換するようになります。この巻の後半には、明石あかしの入道の登場や三位さんみの中將どうのちゆうじょう（もとの頭中將どうのちゆうじょう）の須磨訪問をはじめ、多くの出来事が書かれています。例えば、大宰大式ださいのだいにという人が北方きたのかたや息子の築前守や娘の五節ごせちとともに須磨すまにやってきましたが、築前守だけが僅かな時間、源氏と面会します。この巻に登場する五節ごせちという女性は源氏の愛人の一人で、五節ごせちという名は固有名詞ではなく職名です。宮廷で大嘗祭の前後に行われる5名の舞姫を五節ごせちといいます。源氏の愛人の五節ごせちはその中の一人です。

「須磨すま」の終盤には雷を伴う長雨が続き、海は大荒れになります。そして、源氏の夢枕に神とも思われる人が現れて「なぜ宮から召されているのに、参らないのか」と告げます。源氏は須磨すまでの住まいが耐え難くなっています。

「須磨すま」中で、私にとって特に印象深い2箇所はなちるさとに触れておきます。ひとつは、花散里から、

荒れまさるのき 軒のしのぶを ながめつつ しげくも露の かかる袖かな

という歌が届き、また「長雨に、築地ところどころ崩れて」と聞き、京にいる家司に連絡をとり、近い国々の荘園の者も使って邸宅の修理を命じたことです。

もうひとつは、紫^{むらさきのうへ}上^のの悲嘆です。源氏からの消息を読み、そのまま起き上がれず、悲しみの様子は尋常ではありません。源氏を世になくなった人のように思っていることが不吉で、小納言^{むらさきのうへ}(紫^{むらさきのうへ}上^の付きの女房^{にようぼう})は心配で、呼び寄せた僧都^{そうず}は紫^{むらさきのうへ}上^のの嘆く心を静め、また、源氏が帰京するように願いを込めてお祈りをします。それでも紫^{むらさきのうへ}上^のの悲しみは止まりません。源氏との別れは際限がないものと思うとますます恋しくてたまりません。これがもし、源氏が死んでしまったというなら、どうしようもなく、忘れ草が生えてくる(忘れることができるかもしれない)などと思ったりもします。

この巻には、2種の植物が出てきます。

ノキシノブ

はなちるさと^{のき}の花散里からの歌に「軒^{のき}のしのぶ」という語句が挿入されていますが、軒^{のき}に生えるシノブは今というノキシノブに違いないと思います。ノキシノブのことは、[第59回「樹木の幹に棲む生物たち\(2\) 蘚苔類・菌類など」](#)と[第62回「シダ植物」](#)に掲載しましたが、もう一度触れておきます。写真は第59回に使ったものを再度掲載します。

ノキシノブは日本全土、台湾、朝鮮半島、中国に分布するシダの仲間で、主として木の幹に生えます。根で幹の表面に張り付いており、木から養分を奪うことはありません。すなわち、菌類^{きんるい}のような寄生生物ではなく、地衣類^{ちいるい}や蘚苔類^{せんたいるい}と同様、着生生物^{ちゃくせい}です。

ノキシノブはシダ類ですから孢子によって増えます。孢子^{ほうし}は孢子葉^{ほうし}という葉に作られ

る孢子囊^{ほうしのう}の中に生じます。孢子は成熟すると孢子囊から離れ、木の幹に付着し、発芽して前葉体^{ぜんようたい}になります。前葉体^{ぜんようたい}はノキシノブのもうひとつの姿で、残念ながら、私は見たことがありませんが、小さくて扁平状のもの^{ぜんようたい}のようです。前葉体^{ぜんようたい}の裏には、仮根^{かこん}(前葉体^{ぜんようたい}を木の幹に固定するための根状のもの^{ぜんようたい})と造卵器^{ぞうらんき}と造精器^{ぞうせいき}があり、造卵器^{ぞうらんき}の中の卵^{らん}は造精器^{ぞうせいき}で作られた



ノキシノブ 2月下旬 みずき野さくらの杜公園

精子によって受精します。前葉体ぜんようたいで作られる卵らんが他の前葉体ぜんようたいからの精子により、交雑が起こることもあります。受精卵から生じた幼植物は生長して、おなじみのノキシノブになります。

このサイクルを写真で知るには、[神代植物公園「植物多様性センターの『ノキシノブの生涯』」](#)が参考になります。

ノキシノブは古い家の軒のきにもよく生えるので、その名の由来になっています。石、木片、苔玉こけたまなどに着生ちやくせいさせて、観葉植物としても利用されています。

ワスレグサ

むらさきのうへ
紫 上 の嘆きの中に「忘れ草」という植物の名が出てきます。忘れ草とは何か調べてみました。広辞苑、神明解、語源には「ヤブカンゾウ」、精選版日本国語大辞典、日本大百科全書（ニッポニカ）、ブリタニカ国際大百科事典、百科事典マイペディア、旺文社古語辞典、旺文社全訳古語辞典には「カンゾウ」とあります。日本には一重咲きのノカンゾウと八重咲きのヤブカンゾウが原産しています。ノカンゾウとヤブカンゾウは亜種あしゅの関係にあり、極めて近縁です。結局、どちらが忘れ草なのか、どちらも忘れ草なのかは分からずじまいでした。



ノカンゾウ 7月下旬 取手市貝塚地区



ヤブカンゾウ 6月下旬 取手市貝塚地区

「明石」のあらすじ

「須磨すま」に続く「明石あかし」の冒頭には、その後の須磨すまでの出来事が綴られています。須磨すまでは雨風は止まず、海は大荒れです。邸宅の廊に落雷があつて、廊は燃え上がり焼けてしまいます。源氏は寝殿の後ろにある大炊殿おおいどの（食物を調理する建物）に移り住みます。

ある時、源氏がものに寄りかかってまどろんでいると、源氏の父である故前帝(故院)が現れ、「なぜこんな怪しいところに住んでいるのだ。住吉の神の導きによって、早く船出してここを去れ」と告げられます。「お前が憂いているのを案じて、あの世から下り、ここにやってきたのだ。このついでに内裏だいりに行って、朱雀帝すざくていを説得するつもりだ」といって姿を消します。

あかし
明石の入道は夢のなかで神のような何者かが現れて、(源氏をあかしを明石に呼び寄せるよう)須磨すまに舟を出せと告げます。明石の入道のことはすでに「若紫わかむらさき」の巻(第76回「源氏物語の植物たち(2)」)の中で触れているのですが、説明を省略しましたので、ここで紹介します。

わかむらさき よしきよ あかし あかし
「若紫」の中に良清という源氏の従者が、明石の入道について説明しています。明石の入道はもともと近衛の中将(近衛府の次官)という要職にあったのに、たいへんな変わり者で、自ら身を落として国司として須磨守すまのかみになり、髪を切って入道となり、任期(4年)後も京に帰らず、あかしの海岸近くに豪邸を建てて移り住んでいる人です。

あかし よしきよ あかし あかし
明石の入道は良清の仲介で、舟を出して源氏を明石に呼び寄せます。明石の浜に着いて、意外だったのは人が多いことで、源氏は少し残念に思います。田の実を刈り収める倉町が所々にあります。

一晩、海辺の宿で過ごしたのち、入道は源氏を自分の豪邸へ案内しました。庭も含めて、当時の貴族の邸にも負けない程の華やかな邸宅です。入道はこの邸宅から少し離れた下の家しものや(使用人などが住む家)に移って源氏の世話をします。あかし
明石の入道がこれほどまでに源氏を歓迎するのは、訳があるのです。実は、入道きたのかたと北方きたのかたの間に生まれた娘がおり、高波を恐れておかべ
岡辺(岡の近く)の邸宅に住まわせています。

娘が結婚する相手が土地の人であるならば、入道の家系はその土地に埋もれてしまいます。入道はなんとしてでも娘を源氏めとに娶って貰い、内裏だいりとの関係を復活させたいと強い願いを持っています。前帝の息子である源氏は、これ以上がない身分の人ですから、高望みであるけれど、もし実現したらと思うと、いてもたってもいられません。

ある日入道は、自分の心情(源氏めとに娘を娶らせたいこと)を思い切って告げます。源氏も入道の心を察して、私自身は入道からは、「私のような落ちぶれたものは縁起が悪い」と思っていたのではないかと思って言い出せなかったのですが、そういうことでしたら、一人寝は寂しいので、娘のところにお連れください」と入道に頼みます。

娘は、あまりの身分の違いなどを理由に、源氏に会う気になれません。しかし親の気持ちを察して、源氏にまみえることを心に決めます。源氏は娘のもとに通うようになり、やがて娘は妊娠します。源氏と結ばれたことで、娘は明石上あかしのうへと呼称されます。

源氏と明石上あかしのうへとが結婚する以前のことになりますが、内裏だいりでは、故前帝すざくてい（故院）が、朱雀帝すざくていの夢枕に現れてにらみつけ、源氏に関する多くのことを告げます。朱雀帝は恐ろしく思い、母、弘徽殿太后こきでんのたいこうに夢で会った故前帝（故院）の怒りの言葉を告げますが、「そんな夢に驚くことはない」と問題にしません。

しかし、太政大臣（もとの右大臣）が亡くなり、朱雀帝すざくていは眼病を患い、弘徽殿太后こきでんのたいこうは病気がちになり、だんだんと身体が衰えていきます。朱雀帝すざくていは、このような状況になったのは「源氏は罪を犯したほどではないのに、追放したことに必ず報いが来るであろう」と悩み、たびたび弘徽殿太后こきでんのたいこうに訴えますが、朱雀帝すざくていの訴えをなおも退けます。

朱雀帝すざくていには承香殿女御そきやうでんのようごとの間に男御子おとこみこがいますが、まだ2歳です。公の後ろだてとなり、世のまつりごとを実行できる人は源氏以外に考えられません。朱雀帝すざくていは独断で、源氏だいいりに内裏せいじんに戻るよう、宣旨（帝が命令を下す公文書）を下します。

源氏としては嬉しいことですが、明石あかしを去ることに嘆きもあります。入道は、悲しきで胸がふさがれる思いであるが、「源氏が栄えることこそわが思いが叶うことではないか」と思いなおします。明石上あかしのうへは悲しみにくれています。最後のお別れに、明石上あかし（琴の名手）は琴を弾き、悲しい別れを告げます。源氏は心なごりながら、明石上あかしを明石に残して上京します。

源氏は早速、紫上むらさきのうへの住む二条の邸を訪れ、大人びてなお美しくなった紫上むらさきのうへに会い、喜びを分かちあいます。しかし源氏は一方、明石上あかしに残してきた明石上あかしを思い、苦悩します。

源氏は程なく元の位（参議大将）から昇進して、権大納言（定員外の大納言）になります。お付の人々も以前の位に戻します。

イネ

「明石あかし」の巻には、植物がほとんど出てきませんが、源氏あかしが明石についた時、目に止まったのは、刈り取った稲を貯蔵する倉町でした。平安時代の人たちは、どんな米をどのようにして食べていたのでしょうか。倉町があるほどですから、近くに水田が広がっていたと思われます。そこで平安時代の米や食事について書いてみようと思います。

枕草子には次のように書かれています(池田亀鑑校訂、岩波文庫『枕草子 三巻本』二二七段)。

「八月つごもり、太秦^{うづまさ}に詣づとて見れば、穂^いに出でたる田を人いとおほく見さわぐは、稲刈^{いね}かるなりけり。(中略) これは男^{おとこ}どもの、いとあかき^{いね}稲^{もと}の本ぞ青^{あお}き^もを持ちたりて刈^かる。なににかあらんして本^{もと}を切^きるさまぞ、やすげに、せまほしげに見ゆるやいかでさすらむ。穂^ほをうち敷^しきて並^{なみ}をるもおかし。庵^{いほ}のさまなど。」

(八月末に太秦^{うづまさ}(現在の京都市右京区にある地名で、広隆寺がある)に礼拝に行った折、穂が出ている田に人がたくさん出て稲を刈っているのを見た。(中略) その様子を見ると、男どもが、大層赤い稲の下^{いね}の青い茎^もを持って切っている。なんだかあのようにして茎のもとを切る様子は、易しそうでやってみたく見えるが、どんなものであろうか。穂を敷いて並べてあるのも、近くに作られた廬^{いほ}(農事に使う仮小屋)も趣がある。)

清少納言のいきいきした文章で当時の稲の収穫法が分かりますが、赤い稲といってもどこが赤いのかわかりません。しかし多分籾が赤いのではないかと想像します。穀粒も赤い可能性があります。

なお、松尾聰・永井和子訳・注の『枕草子 能因本』では、『枕草子 三巻本』の上記「二二七段」に当たる「二四九段」の中に、「いとあかき^{いね}稲」の「いと赤き」は「黄金色」と注しており、今日の「黄」も「赤」と呼ばれたとあります。私は平安時代の稲の色については判断しかねます。しかし広辞苑を引くと、赤とは「血のような色。また緋色、紅色、朱色、茶色の総称」、また旺文社古語辞典には、紅、緋、丹、朱などの色の総称」とあり、黄金色を赤に含めることには違和感があります。ちなみに[農水省のサイト](#)(「古代米について教えてください。」)には「日本で食べられている白米は、もともと赤米から生じたものです。」と書かれています。

庵^{いほ}は何のためにあるのでしょうか。私の全くの想像ですが、コメを食べられるようにするには稲穂から籾の脱穀や籾摺りを行わねばなりません。したがってそこでは、食べられる米までにする生産過程が行われたのではないのでしょうか。

この頃の脱穀は、扱^{こきはし}箸^しを使っていたものと思われます。扱^{こきはし}箸は、竹筒を全部割ずに、一端を残して割り、割れ目に稲の茎を挟み、茎を引いて脱穀する道具です。適当な長さに竹を割って、

一端を縄で縛ったものもあるようです。粃摺りには木で作った臼などが用いられたようです。粃摺りについては、[クボタのサイト「白を使った『粃摺り』」](#)^{もみすり}が参考になります。

なお、平安時代の貴族と庶民の食生活については、[刀剣ワールド「平安時代の食文化とは」](#)が参考になりますので、是非開いてみてください。

みずき野の北およびそれに隣接する取手市地域には豊かな水田地帯が広がっています。水田と稲の写真を載せておきます。赤い古代米を祖先とし、改良に改良を重ねて作られた現代の米が豊かに実ります。



小貝川からの用水路の両側の水田地帯
9月中旬 守谷側から取手側を望む



イネの花 8月上旬 取手市市之代



イネの実りの時期 9月上旬 取手市市之代

「^{みをつくし}濔標」のあらすじ

源氏物語に戻ります。「^{あかし}明石」での物語は次の巻「^{みをつくし}濔標」に直接繋がります。「^{みをつくし}濔標」とは、通行する船が通りやすいように、深い水脈を知らせるために立てた杭のことですが、歌では多く「身を尽くし」にかけて使われるそうです(広辞苑)。源氏物語でも、この意味での表題と
思います。

この巻では、源氏28~29歳、紫^{むらさきのうへ}上 20~21歳。源氏は故帝(故院)が夢の中で、この世で犯した罪により、天上から降りてこの世に彷徨っていることを告げられたことを思いだし、^{みはこう}御八講(法華經を読んで追善供養をする法事)を催します。人々は以前のように、源氏に^{なび}靡

き、従っています。弘徽殿太后は「結局、源氏を追放できなかったのか」と嘆きますが、朱雀帝は源氏を頼りにします。

源氏は大納言、内大臣になります。しかしあまりにも仕事が多すぎるので、致仕大臣（官職を返上した大臣の意で、ここでは、元左大臣で葵上あふひのうへの父）を太政大臣にします。元の頭中とうのちゆうじょう将は宰相の中将になっていましたが、権中納言ごんちゆうなごんに昇進します。

この巻での中心は、源氏が明石上あかしのうへへの思いと、紫上むらさきのうへの嫉妬です。源氏は明石上あかしのうへが娘を産んだことを消息により知ります。源氏は亡くなった宮内卿の宰相の娘で母も亡くし、最近子を産んだ娘を乳母として明石上あかしのうへのもとに送ります。大変気立てのいい娘なので、入道も感謝し、明石上あかしのうへも慰められます。

源氏が明石上あかしのうへを愛人にし、娘を産んだことを紫上むらさきのうへがなんらかのつてで知ってしまうのを恐れ、源氏は真相を伝え、色々と言ひ訳をしますが、紫上むらさきのうへの恨みは収まりません。今まで明石上あかしからの手紙も、もてあそびだったのではないかといひ、源氏が琴を弾いてくれるように頼んでも、明石上あかしのうへが琴の名手であったことを耳にし、琴に触れようもしません。源氏は紫上むらさきのうへが嫉妬し、すねる様をかえって可愛いと思います。

年が改まり、朱雀帝は退位し、春宮とうぐうに位を譲り、自らは院（上皇、朱雀院）になります。そして春宮は冷泉帝れいぜいていと呼ばれます。

源氏は明石上あかしのうへの娘のことが気になり、「五月五日は五十日に当たるはず」と産後の日数を人知れず数えており、使いの者に「必ず、その日違えず、明石あかしに着け」と命じ、使いはその通り、五日に行き着きます。そして、源氏からの消息を明石上あかしのうへに伝えます。

うみまつ
海松や 時ぞともなき かげにみて
なに
何のあやめも いかがわくらむ

（海岸の松のようにいつも変わらず過ごしているあなたは、あやめの日（五月五日）という出産五十日のめでたい日を通常の日のように過ごしているのではないか）

注：「いか」は「五十日」の意。「わくらむ」は「別くらむ」の意。

あかしのうへ
明石上の返歌は、下記です。

数ならぬ み島がくれに 鳴く鶴を けふもいかにと 訪ふ人ぞなき

(ものの数にも入らない島に隠れて泣いている鶴をこの特別な日に、娘さんはどのようですかと尋ねてくれる人もいません。)

注: 「島」を自分に、「鶴」を娘に例えている。

アヤメ、ハナショウブなど

源氏の歌に「あやめ」が挿入されていますが、ハナショウブもアヤメと思っているかも知れません。アヤメは水中ではなく、陸上に生えます。守谷市では四季の里公園で6月上～中旬にアヤメ属の花が見られます。アヤメやカキツバタもありますが、断然多い植物は池に植えられたハナショウブ(野生種のノハナショウブの園芸種)です。カキツバタも水中に生えます。また近頃は外来のキショウブが水中に野生しているのをよく見かけます。キショウブは花菖蒲と交配して、ハナショウブの品種改良に用いられています。シャガは、日陰に生え常緑であることなど、他のアヤメ属とは異なっています。以上に挙げた植物は、全てアヤメ科アヤメ属の植物です。なお、端午の節句(現在は「こどもの日」)に菖蒲湯に使うショウブ(風呂に入れて香りを楽しむショウブ)はアヤメ科ではなく、ショウブ科の植物です。

平安時代の貴族が最も好きだったアヤメ属の花はカキツバタだったと思いますが、残念ながらカキツバタの写真を撮っていませんでした。カキツバタは愛知県の県花です([愛知県ホームページ「あいちのシンボル\(花・木・鳥・魚\)一県の花 カキツバタ」](#))。

また、カキツバタの歴史については、[日本花菖蒲協会会報 32 号「カキツバタの歴史と鑑賞」](#)が参考になります。

ちなみに、外来種(平安時代の人々は見ることがないもの)を含めて、私が撮ったアヤメ科アヤメ属の写真を掲載しておきます。



アヤメ 5月下旬
取手市市之代農業ふれあい公園



ハナショウブ 6月中旬 守谷市四季の里公園



キショウブ 5月中旬 守谷市本町地区



オランダアヤメ(ダッチアイリス)
5月下旬 守谷市本町地区



ドイツアヤメ(ジャーマンアイリス)
5月下旬 みずき野第2調整池



シャガ 4月上旬 取手市上高井地区

みつくし
「みつくし標」に戻ります。

その後、源氏は大勢の従者を引き連れて、衣装も華やかに、住吉詣に向かいます。明石上も、
やはり住吉に詣でるつもりで舟で岸に向かいますが、源氏の車を岸近くから眺め、姿が見え

ず、口惜しく思う場面があります。源氏も、明石上あかしのうへが近くにきていたことを後で知り、残念に思っています。

御息所みやすどころは齋宮が代ったので、娘（前齋宮）とともに都に戻ってきますが、やがて病を患い、源氏に娘の面倒を見てくれることを頼んだのち、病がますます重くなり、ついに亡くなってしまいます。これまで、前齋宮は常に母（御息所みやすどころ）と常に離れず暮らしてきたので（伊勢でも母とともにいた）、その寂しさはいかばかりか察せられます。おまけに六条宮邸は京極にあつて、寂しい場所です。源氏は前齋宮を我が子同様に扱いたいと思ひ、とりあえず、二条の紫上むらさきのうへの邸宅に移そうと思ひ、紫上むらさきのうへも同意します。藤壺中宮ふじつぼのちゅうぐう（尼になっている）は、いずれ、冷泉帝れいぜいていに見合わすようにと進言します。

なお、源氏の内裏での宿所は淑景舎しげいしゃで、春宮は近くの梨壺とうぐう（昭陽舎せうやうしゃ（庭に梨の木が植えてある）に住んでおり、源氏は春宮と親しく話を聞き、面倒をみていたことが書かれています。

ナシ

果物のナシは大好物ですが、残念ながら花は見たことがありません。現代のナシの花については、[家庭画報のサイト「ナシの花を見たことはありますか？ サクラにも劣らない白花の美しさ」](#)が参考になります。

しかし、平安時代のナシがどのようなものかは分かりません。日本のナシはヤマナシが改良されたものだそうです。週刊朝日百科「植物の世界」や、その他の文献によれば、奈良時代にはヤマナシが栽培されていたそうです。その後ヤマナシが改良され、日本ナシが作られました。したがって、平安時代のナシもヤマナシだった可能性があります。あるいは多少改良が進んでいたかもしれません。ヤマナシは4～5月に5枚の白い花弁の花を咲かせ、秋に2～3センチほどの小さな実が付きます。

ヤマナシについては、[船橋市公園協会「樹木図鑑—ヤマナシ」](#)が参考になります。